

生瀬中3号 うち どく

平成22年6月25日



家読だより



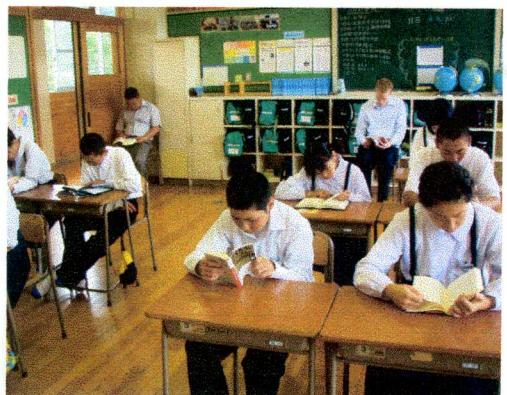
朝読は、うちどく(家読)のメロディーを合図に♪

昨年の秋、佐賀県伊万里市で第1回「読書サミット」が開催されました。その際、「うちどく」の合唱曲が披露され、大子町の各小中学校も、そのCDをいただきました。

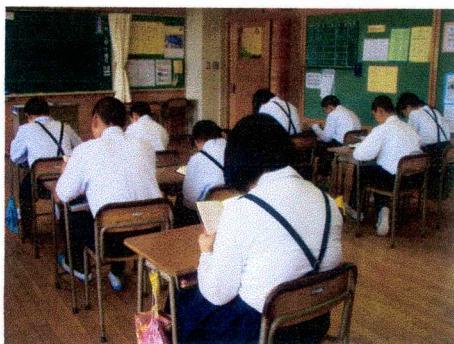
朝8時になると、本校ではその合唱曲のオルゴールバージョンを校内に流し、朝の読書を促しています。

どのクラスも8時5分には席に着き、静かに読書が始まります。担任の先生をはじめ学年の先生も全員、生徒と一緒に読書を楽しみます。

今年は、第2回「読書サミット」が、秋に大子町の「まいん」で開かれる予定です。生瀬中は「うちどく」の指定校として「学校紹介」を10分程担当します。本に親しみ、友達同士伝え合い、広め合う様子の一端が紹介できたらと考えています。



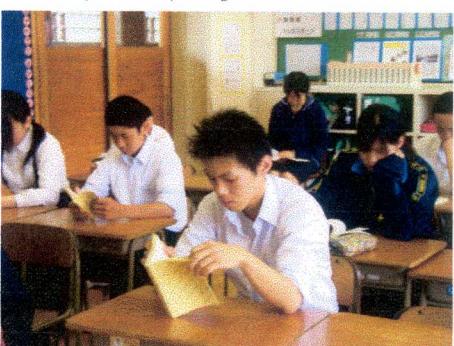
↑ 先生と共に朝読する様子



↑ 1年生の朝読風景



↑ 2年生教室



↑ 3年生教室

本の話のコーナー

今回は
山田 悠夏 先生です。

～「学生の頃 出会った本」～



大学で寮生活をしていた頃に出会った1冊の本の話をします。タイトルは『もの食う人々』。ルポライターの辺見庸さんが世界を旅し、食に関する体験をまとめたものです。といっても、決してグルメ紀行本ではありません。

バングラデシュの屋台で口にしたものは、実は高級ホテルから出た残飯。しかしこれも市民にとって安価で大切な食料だと知り、そこから「とにかくなんでも口にする」辺見さんの旅が始まります。

バナナで有名なミンダナオ島で知った、戦時中の日本兵が犯した恐ろしい食の悲劇。ウクライナでは、 Chernobyl原発事故後も、危険地帯の故郷で放射能に汚染されたキノコのスープを食べて生きる老人たちの話。自分たちの食事より高価な魚を、日本向けキャットフードに加工するタイの工場員の話。火山の爆発により山から降りてきて、酒やインスタント食品の味を覚え、独自の鋭い感覚が失われていくフィリピンの原住民の話。

一見、重く暗いテーマのように感じられますが、登場する人々は皆温かくユーモアがあり、人生の一日一日を大切に生きています。読み終えたあと、普段なら食べ残していた寮のおかずを、無言で口にしたことを覚えています。

日本は飽食の国。毎日のようにテレビで流れる大食い対決、グルメツアーや…。おいしいもの、高価なものを食べることが本当の幸せなのか?と考えさせられる本です。